

＜年会・合同シンポ報告＞

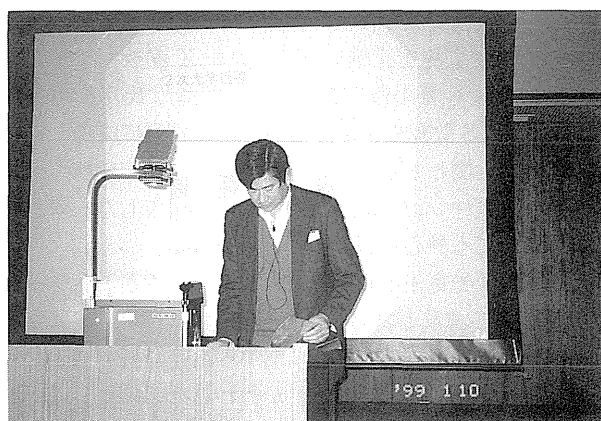
## 第12回日本放射光学会年会・ 放射光科学合同シンポジウム

実行委員長 大隅 一政 (物構研)

表記会合が平成11年1月7日から9日までの3日間、高エネルギー加速器研究機構内で開催された。この会合は4施設(高工研, 分子研, 物性研, SPring-8)の廻り持ちで開催されることになっている。この形式で始まったのは平成7年からであり、一巡して今回の高工研での開催は2回目となる。昨年5月には学会行事幹事である水木純一郎氏(原研・関西研)を委員長とする第1回組織委員会が開かれて今回の会合の準備が始まった。組織委員会は各施設及びそれらのユーザー団体を代表する委員で構成され会合の枠組みを決めることが第1の仕事である。今回の会合は昨年度の西播磨地区での開催と同様に2日半の日程で行うことが決定した。筑波地区での会合に高工研の他、ノバホールを中心としたつくばセンターでの開催も考慮されたが費用の点で今回は見送られた。オーラルは3会場でパラレルに行えば全発表を収めることが可能であるが、ポスターは最近の発表件数の増加傾向から前回使用したレクチャーホールでは不足すると予想されたので体育館で行うこととした。また、懇親会についても予想出席者数から所内のレストランで行うことは困難ではあるが、つくばセンター周辺に会場を求めるとしても時間に余裕のないプログラム編成から参加者の移動時間を考慮すると所内で行わざるを得ないことになった。組織委員会の他の重要な任務は、特別展示(企業展示)になるべく多くの企業に参加して頂けるよう運動することである。昨年は45社の参加を戴いているので昨年並みにしたいとの委員長の強い意向で事務局を中心に7月から案内状の送付等の仕事を開始した。最終的には40社(41コマ)の参加を戴いた。この不況下において各社とも大いに努力して戴いた結果でありご協力に感謝したい。

プログラム委員会は辻和彦氏(慶大・理工)を委員長として7月に第1回会合が持たれ、昨年同様の枠組みの中での「特別講演」及び「企画」が検討され、特別講演2件及び企画が4件となった。中でも企画として「加速器研究者と利用者のコミュニケーション」と題して参加者を含めたパネルディスカッションを如何にして成功させるかについて最も多くの時間を割いて議論が行われた。

実行委員会は開催地が高工研に決定したことから、高工研所属の方々を中心に構成することとした。他の機関から



は組織委員長およびプログラム委員長を含めて4名の方々をお願いした。実務は8月から始まったが、第1回実行委員会を10月に開き可能な限り会議の回数を抑えた。つくば地区の特殊性として参加者の宿泊にできるだけ多くの高工研の宿泊施設を提供することが期待されており、今回は前回は大幅に上回る100名の枠を確保することができた。

年会・合同シンポジウムとなってから行われている常設展示の施設報告は昨年同様14件あり普段は利用しない施設の状況、また計画中の施設等の情報を得る良い機会となった。

初日である1月7日は午前からSPring-8利用者懇談会

幹事会等が開かれて年会・合同シンポジウムが開始されたが、参加登録は前日からの宿泊者を含め予想を遥かに上回る出だしであった。

2日目に行われた「特別講演」はSwedenのLinkoping大学教授でありX線の共鳴ラマン散乱の理論的研究で国際的に著名であり現在は分子研に滞在中のHans Agren氏による「Dynamical Aspects of Inner Shell Raman Scattering」と題する講演があり、続いて村上洋一氏(物構研)が「共鳴X線散乱による軌道秩序の観察」を話された。前者は主に窒素分子の軟X線共鳴ラマン散乱の理論に関するもので、光励起後に始まる内殻正孔の減衰、励起光の位相減衰、励起電子の波束の伝播、窒素原子のイオン化解離等の動力学過程を正確に考慮した軟X線ラマン・スペクトルの理論計算の報告を行った。後者は氏が放射光X線によるATS散乱の手法を用いて直接観察に成功した磁場誘起物性と関わりがあるとされる軌道の秩序状態をペロプスカイト型マンガ氧化物を例にして報告した。何れの講演に対しても熱心な質疑応答が行われた。

企画(1)は「光電子の角度分布で何が分かるか」をテーマとして3件の講演があった。企画(2)はパネルディスカッションとして「高輝度放射光に関する加速器研究者とユーザーとのコミュニケーション」が行われた。最終日に行われた企画(3)は「顕微鏡的観察」を主題として4件の講演

があり、企画(4)「軟X線-X線発光分光が拓く世界」に関して3件の講演が行われた。どの「企画」も会場の8~9割の席が埋まり活発な質疑が行われていた。企画(2)はプログラム委員会において成否を案ずる意見も出たこともあり注目していたが、世話人である神谷幸秀氏(東大・物性研)の抑制の聞いた挑発に始まり、加速器側、ユーザー側夫々2人ずつの報告を中心とする講演に加えて「さくら」による話題提供があった。形としては定型的ながら世話人の周到な脚本・演出が効き目を発揮する気配を感じさせながら時間によって打ち切られたのは残念であった。最後までセミナーホールに参加者がほぼ一杯であったことから「まあ合格点として良いであろう」(世話人の河田洋氏(物構研)の「まとめ」における纏めの言葉)出来であった。この種の企画は本学会を特徴付けるものとして益々意義あるものに育ててゆくことが必要であろう。

一般発表は例年通り発表者の選択に応じてオーラルとポスターに分かれて行われた。オーラルは2日間にわたり3会場を使って5分野(XAFS(6件)、生物関連(6)、VUV-SX(18)、加速器・装置(6)、回折・散乱(12))に分かれて行われ発表総数は48件であった。ポスターセッションも2日間で、各分野(XAFS(27件)、生物関連(22)、VUV-SX(57)、加速器・装置(37)、回折・散乱(35))に加えてポストデッドライン(13)の発表が行わ



れ総数は191件であった。体育館を使用したこの会場は比較的広いので、かなり余裕のあるポスター配列ができたが強力な暖房器具を騒音の激しさから常時使うことができなかったために十分な暖房ができず寒い思いをしたり風邪をひいた参加者もあろうかと心配した。

総会は2日目の午後にセミナーホールで行われ執行部提案の活動方針等が承認された。本来はセミナーホールより収容人数の多いレクチャーホールで行うのが筋であろうがここを懇親会の会場として使用する準備作業のために止むを得ない措置であった。続いてレクチャーホールに場所を移して懇親会が行われた。木村物質構造科学研究所所長の挨拶、松下副所長の乾杯のあと参加者夫々に情報交換・懇談に時は過ぎていった。途中で挨拶に立った佐藤繁新会長が放射光の利用が日常的になるに従い、放射光そのものの理解が充分でなくなる傾向にあることを危惧された。多くの大学で施設を持つようになり、基礎をしっかり学んだ学生が育つことの重要性を改めて感じた。今回の懇親会は

会場を提供して業者にテーブル・盛りつけ等を依頼したが、食事中のサービスは出来ませんということでも些か心配した。然し実行委員及びアルバイト嬢各位の努力によってこれが大きな支障はなかったと思うがかなり無理な計画であった。また会場を明日の年会会場として再び使用するための準備のため、十分な懇談の時間を確保できなかった点を参加者にお詫びしたい。

最終的には招待講演者を含め参加者は426名であった。年々発表件数、参加者が増えてきていることは誠に結構なことである。次回は分子研周辺での開催となるが益々活発な会となるよう期待している。また、近い将来には広島大学或いは立命館大学が持ち廻り施設に加わり、夫々の地で特徴ある年会・合同シンポジウムが開かれるよう希望したい。

最後に始めから終わりまで大変お世話になった学会事務局の方々に御礼申し上げたい。